

2022年12月4日主日礼拝

説教題「天に栄光、地に平和」ルカによる福音書2章8～14節

主任牧師 加藤 誠

「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ。」(ルカ2章14節)。

クリスチャンが手紙を書くとき、その書き出しに「主の御名を賛美いたします」とか「頌主」という言葉を添えますが、「栄光在天、平和在地」という言葉もよく使われる書き出しです。「天に栄光があり、地に平和があるように」という祈りの言葉であり、最初のクリスマスに天使たちが歌った賛美でもあります。今朝はこの言葉にどのようなメッセージが込められているのかを聞いていきましょう。

イエス・キリストはローマ皇帝アウグストゥスの世に生まれました。アウグストゥスの本名はオクタビヌスといいます。彼はローマ貴族の家に生まれ、成人してユリウス・カエサルの息子となり、カエサルの暗殺後、政敵との争いに勝利を収めて初代ローマ皇帝となりました。彼はローマ支配地域の内戦を終わらせ、イタリアからアフリカに至るまでの地中海沿岸に広がる広大な領土に平和と繁栄をもたらしたので、元老院から「アウグストゥス」（偉大な、崇拜されるべき者）という称号を与えられ、「パックス・ロマーナ（ローマの平和）」を成し遂げた英雄として「神の子」と呼ばれ、「救い主」としてほめたたえられました。ベルリンのペルガモン博物館所蔵の碑文にはこう書かれているそうです。「皇帝アウグストゥスこそ、平和をもたらす救い主であり、神なる皇帝の誕生日が世界にとって新しい時代の幕開けを告げる福音の始まりである」。私たちキリスト教会がイエス・キリストのことを「救い主」と呼び、キリストによる「良き知らせ」を「福音」と呼びますが、実は「救い主」という言葉も「福音」という言葉も、もともとはアウグストゥスという皇帝のために用いられた言葉だったのです。当時の世界中の人々が、皇帝アウグストゥスの栄光をたたえて、「神の子」「救い主」と呼び、その誕生を「良き知らせ（福音）の始まりだ！」と叫んでいた時代のただ中に、ルカ福音書は天使の言葉を告げます。「きょうダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけの中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう」。ローマの宮殿で世界の富と権力を手にしている皇帝ではなく、貧しく小さく、馬小屋の飼葉おけの中に生まれた赤ん坊こそ、すべての民の「救い主」であり「大きな喜び」（福音）の始まりとなる方だと天使は告げたのでした。

このルカの知らせは、私たちに一つの決断を迫ります。「あなたは誰を救い主と呼び、大きな喜びの始まりを受け取っていくのか」と。きらびやかな宮殿に住むローマ皇帝か、それとも飼葉桶の中の赤ん坊か。もしキリストの時代に SNS があ

ったなら、このルカ 1 章の天使たちの賛美に対して、大変な罵詈雑言が浴びせられることでしょう。「天使たちが野原の羊飼いたちにあらわれて賛美を歌ったって？」
「何を言っている？」 「正気か？」 「救い主が馬小屋の飼い葉桶の中にだって？」
「馬鹿も休み休み言え！」 「救い主は皇帝アウグストゥス以外にありえない！」と。
けれどもアウグストゥスが成し遂げた「ローマの平和」がほんとうに人々の心を安らぎと慈しみで満たすことができたのでしょうか。アウグストゥスを含めてローマ皇帝になった 69 人のうち 43 人が、暗殺、自殺、戦死という暴力による死を迎えているそうです。「ローマの平和」を成し遂げたと称賛を浴びながら、皇帝の周りには常に陰謀が渦巻いて皇帝の心の中に「安らぎ」はなく、「孤独」と「疑い」と「憎悪」と「怒り」に支配されていたのでした。

それに対して聖書は、馬小屋に生まれた赤ん坊こそ私たちにほんとうの「平和」と「大きな喜び」をもたらす「救い主」であると語ります。「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」。ここで「御心に適う人」とは「神が喜ばれる人」という意味ですが、どのような人のことでしょうか。「信仰深い人」のことでしょうか。福音書で主イエスが「あなたも神さまに喜ばれている大切な人だよ」と神の国の福音を届けていかれた人々の顔触れをみると、実にさまざまな人たちがその招きを受けています。信じがたいことに、主イエスを敵視し罵詈雑言を浴びせている人たちも福音の招きを受けています。とすれば「御心に適う人」とは「すべての人」と読み替えてもよいのではないかと。少なくとも主イエスは、どんな肩書や立場、どんな状況にある人に対しても熱く、優しく、時に激しく、神の国の平和を届けていかれました。人々が「どうしてあんな男の家に泊まるのか？」と非難を向けたザアカイに、主イエスは「この人もアブラハムの子だから」と言われて「神の喜び」を届けましたし、17年間病気のために腰が曲がったままの女性のことを「この人もアブラハムの娘だから」と言われて、この女性の存在を神さまが喜んでおられるしるしとして病気を癒されました。また「ブドウ園の労働者のたとえ話」では「夕方の一時間しか働いていない者」にもブドウ園の主人に「わたしはこの最後の者にも同じようにしたいのだ」と言わせて一デナリオンの報酬を与えています。私たち人間が「一番最後の者」と評価する人を、神さまは「ご自分の喜びを届けたい大切な人」と見ておられるからです。この一人ひとりに注がれている「神さまの喜び」を受け取っていくときに、私たち人間の間には「平和」が与えられる。これが聖書の「福音」（良き知らせ）です。私たちが「見えるもの」（その人が成し遂げた業績、成果、成功）をほめたたえるのではなく、すべての一人ひとりを愛し、喜んで大切に覚えてくださっている「神さまの愛」をほめたたえる者とされる時、私たちの間に「キリストの平和」が実現するのです。飼い葉桶に生まれた赤ん坊から始まる「福音（良き知らせ）」を受け取るクリスマスとなりますように。